



### 公立館林厚生病院を漢字一文字で表すと

# 信

当院のビジョンを受診者に分かりやすく知ってもらうためのキャッチフレーズ「信頼、安心、すべては患者さんのために」から。人と人との信頼は医療を支える普遍的価値です。

企業長兼院長  
**新井 昌史**  
Masashi Arai

**鶴** が南北に翼を広げて羽ばたくシルエットに似ていることから「鶴舞う形」と表現される群馬県。鶴のちょうど頭部に位置するのが館林市だ。首都東京へは60km圏内と県内で最も東京に近く、東北自動車道や東武鉄道を使えば約1時間でアクセスできる。その一方で、医療圏内の医師数は全国平均を大きく下回るなど課題も抱えている。このような背景の下で、公立館林厚生病院は地域唯一の公立総合病院として1939年に開設された。開設から80年余を経た2022年度には10年計画を定め、アフターコロナの病院像を地域住民や働くスタッフたちに向けて示す。地方公営企業法・全部適用に移行して新たな船出を切った、同

日本列島  
病院探訪  
全国の特徴ある  
病院を取材する  
“フォルテ”



# “FORTE”

邑楽館林医療企業団

公立館林厚生病院

Tatebayashi Kosei General Hospital

## 全部適用を契機に10年計画を策定 覚悟を持って自分たちの医療を貫く

Interview: 「ドクターズマガジン」編集部 Text: 横井かずえ Photograph: 緒方一貴

|   |   |   |
|---|---|---|
|   |   | 1 |
| 4 |   | 2 |
| 9 | 7 | 5 |
|   | 8 | 6 |
|   |   | 3 |


1. 病院外観 2. 救急センター入口 3. 企業長兼院長の新井昌史氏 4. 集合写真 5. 食堂・デイルーム 6. 総合待合ホール 7. 8. 経験豊富なスタッフによるチーム医療で急性期から回復期までリハビリテーション医療を提供 9. 手術風景



29の診療科と323の一般病床、6つの感染病床を有し、急性期医療から在宅医療まで切れ目なく対応する公立館林厚生病院。中でも力を入れているのは、がん治療、循環器内科、呼吸器医療、血液・腫瘍内科、脳神経外科の5つの領域だ。がん治療については手術、化学療法、放射線の三大治療法において県内トップレベルの経験と実績を有し、特に放射線治療では強度変調放射線治療（IMRT）を導入して年間約3700件の実績を上げる。

循環器内科ではカテーテル治療に注力しており、経皮的冠動脈形成術（PCI）も積極的に行う。夜間も2人の待機医師を配置するなど、24時間365日

1



全国平均を大きく下回る医師数  
がんや循環器など5領域に注力

院の課題と展望を新井昌史企業長兼院長に伺った。



つでも心筋梗塞や狭心症の治療ができる体制を整え、年間の治療実施件数は約150件に上る。また近隣には呼吸器疾患に対応する病院が少ない中で、3人の呼吸器内科医をそろえて肺がんや間質性肺炎、肺気腫など幅広い病気の治療に当たる。血液腫瘍内科は常勤医が1人ながらも白血病や悪性リンパ腫など血液がんへの専門治療に取り組み。

脳神経外科では、松本正弘副院長をはじめとして、3人体制で脳卒中や脳血管障害、くも膜下出血に対するカテーテル治療に取り組んでいる。また、開頭術による治療も行うなど、血管内治療と直達手術の両面から緊急

時に対応する。

同院が所属する太田・館林治療圏の特徴は、地域の医療資源が極めて乏しいことだ。人口10万人当たりの医師数は141・9人で、全国平均の256・6人、県平均225・2人を大きく下回り、県内に10ある医療圏内で最も少ない。関東圏でありながらこれほどまでに医師数が少ない理由の一つは、近隣の群馬大学や獨協医科大学、自治医科大学、埼玉医科大学など、どの大学からも50〜60km離れ、ちょうど狭間に立地することにある。

「このエリアにある総合病院は当院のみという状況です。そのため救急医療から災害医療、感染症までほぼ全てに対応する責務があるのです」

常勤医がいない精神科常勤医が1人しかいない産婦人科、小児科、整形外科などを除けば、地域のはほぼ全ての患者は同院へ集中する。地域の救急搬送の約7割を収容し、救急車の応需率は95・3%に上るなど、ほぼ断ることなく受け入れる。

また地域特有の課題としては、開業医が少ないことから逆紹介が困難であることや、自治体立病院として自治体財政規

模の縮小などの課題も抱えている。さらには医師不足によって急性期医療のニーズに対応しきれないことや、在院日数短縮による病床稼働率の低下など経営上の問題への対応も喫緊の課題だ。

こうした課題を解決するため、2022年度から病院の経営形態を変更し、地方公営企業法・全部適用に移行した。地方自治体立病院には、開設者が病院の運営方針の細部にわたって決定を下す一部適用方式と、医療本体の部分については開設者が任命した病院事業管理者(病院長など)が判断する全部適用方式の2種類がある。同院はこれまで一部適用方式を採用していたが、新型コロナウイルス感染症など医療情勢がめまぐるしく変化する中で、迅速に病院の方針を決定するためには全部適用がふさわしいと判断した。

「これまでは館林市に加えて、<sup>おた</sup>呂楽郡5町の5つの自治体の首長が管理者となっていました。そのためスピーディーな意思決定が難しいという課題があったのです。全部適用としたことで私が企業長兼院長となり、スピーディーな意思決定による病院運営が可能となりました」



## 2

### 10年計画で未来へのビジョンを描く 病院活動の見える化でブランディング

のニーズにも応えられる。そんな好循環が生まれると期待しています」

10年計画は、直近に取り組み課題と10年以内に取り組み課題医師確保などの条件を満たしたから取り込む課題の3つのランクからなっている。3〜4年以内に取り込む課題(Aランク)は、手術支援ロボットの導入、産後ケア事業拡大のための病室変更、病院広報活動の強化、訪問看護事業の強化である。10年以内に取り込む課題(Bランク)は、予防医学センターの拡大・移転、局所麻酔手術室の整備、放射線読影室の整備、西地区の整備(宿舍の解体など)、駐車場の整備など。そして、医師や予算が確保でき次第取り込む課題(Cランク)が新規手術棟や新規リニアック設置用建屋の検討、管理棟の整備、スキルトレーニングセンターの新設だ。

このうち手術支援ロボットは7月からの稼働を予定している。また、産後ケアは従来取り組んできた活動の一つだ。同院には産婦人科医が1人しかいないため、出産には対応できない。その分、産後の母子をサポートする活動を行っており、母子は自己負担1割で助産師や看護師のサポー



トを受けることができる。

また、「病院活動の見える化」を目指し広報活動を強化している。

「例えば心臓のカテーテル治療は20年前から行っていますが、まだまだ認知されていません。あるいはがんについても、がんセンターと同レベルの医療ができることは知られていません。こうした活動を見える化するために、メディアを活用して積極的に情報発信する他、講演会や患者会への参加、パンフレット作成なども行いたいと考えています」

常勤医については、5カ年計画で現在の47人から60人までの増員を目指す。特に呼吸器内科や消化器内科、整形外科、血液・腫瘍内科、救急科など、患者数に対して医師数が少ない診療科を底上げしたいと考える。また、新規に腎臓内科や乳腺内分泌外科の開設を目標としている。

「10年計画を提示することで、職員が一丸となって考えてくれるなどコミュニケーションが活発になりました。計画を実現するには各部署との深い議論が必要で、さまざまな人の意見が入ることで、今後、議論がどのように進展していくかがとても楽しみです」



# 3

## 充実するワークライフバランス 研修は3年連続フルマッチ

10年計画によるブランディングに加えて、大きな魅力となるのは充実した福利厚生やワークライフバランスに優れた勤務環境だ。地域で唯一の総合病院ではあるが20時、21時まで残って働く人は多くない。診療部長クラスであっても、手術がなければ18時には帰宅しているという。実際に2024年度から始まる医師の働き方改革についても、時間外労働の上限である年間960時間を超えて働いている医師はいない。今後も外勤医師などを手配することで、十分に対応可能となっている。

「自分のペースで働きたい、仕事もプライベートも両方大切にしたい、平日夜や週末は家族との時間を大切にしたいという先生にはびつたりの環境です」

臨床研修では2020年度から3年連続でフルマッチが続くなど、研修医に人気の病院である。人気の秘訣はいくつかあるが、中でも魅力なのが自由度の高いプログラムだ。24カ月間の研修中、15カ月は必修だが、残りの9カ月は自由に研修先を選ぶことができる。

「院外施設での研修は最大で6カ月間というルールがありますが、基本的に研修医が学びたい場所で学びたいことを優先してもらっています。研修先や研修内容をかなり自由にしている点

が、選ばれる理由の一つになっていると感じています」

研修は血液・腫瘍内科や循環器内科などと細分化して行うのではなく、内科として総合的に研修する中で各領域の専門医から指導を受けるなど、総合内科のような形で行っている。また当直時に入院した患者については、指導医の下で退院まで研修医が担当するしくみを導入し、継続して診られる環境を整えている。

研修医からは「熱心な指導医が多い」「ローテーションで回っていない科であっても相談に乗ってくれる」「医師、研修医、コ



メディカルが互いに尊重し合う中で職務を全うして働きたい」といなど、指導医と研修医の垣根が低いことや丁寧な指導が受けられることを歓迎する声も寄せられている。

指導医だけではなく看護師や検査技師などのコメディカルとも風通しの良いコミュニケーションを図れるのが魅力の一つだ。

「希望があれば、生理検査室で技師から研修を受けることもできます。コメディカルには地元出身者が多く、自分たちの地域の病院は自分たちで守ろうという意識が強い人が多いのです。そのため医師の育成にも協力的で、病院全体で医師を支える風土が整っています」

企業団内に公立館林高等看護学院を持ち、優秀な看護師を輩出していることも強みだ。

「患者の数に比べて医師の数が

少ないかもしれませんが、看護師の能力が高く、手厚くサポートしてくれます。救急外来などでも看護師のトリアージによって、軽症患者に時間を取られないうまくが確立されています」

新井氏が2015年に病院長に就任し、10年計画という新たな目標ができた今は、さらなる医療の充実や病院財政の改善などに向けて着実に歩を進めていく。

「10年計画の実行は投資であり、費用対効果などを考えると責任の重さに眠れない夜もあります。しかしこれを乗り越えてこそ、真に地域に選ばれる、次世代の病院へ成長できると信じて進んでいきたいと思います」

